印度學佛教學研究第43巻第1号　平成6年12月　（39）

Veda 祭式の brahmodya と Saṃyutta-Nikāya I 1, 2, 3

後　藤　敏　文

1.　祭官階級の「聖なる」次元を領域とするVeda文献と仏典とでは時代・性格が隔るが，Mahābhārataと仏典とにある様な平行句・類似句[1]が見い出されても不思議ではない。しかし，具体例の指摘は殆どないように思われる。榎本文雄が指摘したAtharvaveda V 19, 8d と Suttanipāta 770d の完全な一致 *nāvaṃ bhinnā́m ivodakā́m*「壊れた舟に水が［流れ込む］ように」はそれ故，定型表現とはいえ重要である（『仏教史学研究』22 p. 33）。今回検討する例も謎々・格言に過ぎないが，仏典成立の背景を探る方向性の中で確認しておく意義はあろう。

2.　謎賭け問答は，古来「言葉による戦い」の中で重要な役割を果し，或いは儀礼・形式化された風俗となって様々な時代・民族・地方に記録されている。[2] Veda語 *valh*「謎を掛ける，謎によって挑む」[3]にも古い由来が推定される。[4]　謎[5]による問答形式の論争は古代インド思想の展開に大きな役割を果したが，元来整合性のある答を確信をもって言うことが求められる[6]真剣勝負であったことは，*brahmódya-*[7]と呼ばれる問答の場面からも裏付けられる。祭官の要職を争うグループや個人間の「決闘」の場面が多い。Janaka王の懸賞を巡ってYājñavalkyaがŚāklyaを負かす話（ŚatapBr XI 6, 3, JaimBr II 76f.），これを基に有力祭官兼学者の挑戦を順次退ける構成にしたBṛhĀrUp III は有名である。後にも例えばMBhār III 133f.（Aṣṭāvakra対Bandin），Uddālaka-Jātaka（487），Setaketu-Jātaka（377）[8]に類似の「話」が見られる。問答全般を通じて，概念を数にくくって挙げる形式が多いことも，後の思想の展開に無視し得ない意義をもつ。

3.　実際の決闘とは別に，祭式中に儀式として組み込まれたbrahmodyaがある。Aśvamedhaにおける代表的な例を紹介する：[9]

A「誰がいったい一人きりで動くか。誰が，また，いったい再び生まれるか。何がいったい寒さの薬か。何がまた［穀物を］蒔き入れる大きな器か」とHotṛがAdhvaryuに問う。A′「太陽が一人で動く。月が再び生まれる。火が寒さの薬である。地が大きな蒔

き入れる器である」と答える。—B「何がいったい太陽に等しい輝きか。何が海に等しい池か。何が大地よりかさ高いか。分量の見出されない（際限のない）のは何か」とAdhvaryu は Hotṛ に問う。B′「真理（*satyam*; 4.2.a: *bráhman-*）が太陽に等しい輝きである。天が海に等しい池である。Indra が大地よりかさ高い。他方，牛の分量は見出されない」と答える。—C「君に問う，神の連れよ，知るために，もし君がこのことに思考で到達しているならば。何の三歩の中に Viṣṇu は立ったのか（VājSaṁh: 請じ入れられたのか）。何の中に全世界は入り込んだのか」と Brahmaṇ は Udgātṛ に問う。C′「全世界が入り込んだ，その三歩の中に私がいるのだ。一度で私は天とそして地とを巡り行く，一つの肢体でこの天の背を」と答える。—D「何の中に Puruṣa は入り込んだのか。何が Puruṣa の中に到ったのか。これを，Brahmaṇ 祭官よ，我々は君に謎として課す。君はこれについて我々に何と答えるつもりか」と Udgātṛ は Brahmaṇ に問う。D′「5つのものの中に Puruṣa は入り込んだ。それら（5つ）が Puruṣa の中に到ったのだ。このことを君に返事として考えつつ，私はここにいる。幻力（*māyā́-*）について君は私より優れた者とはならない」と答える。—（祭官たちは）東へ向かって退場しつつ，一人ずつ祭主に問う：E「私は君に大地の外れ（上）の端を問う」，[「私はどこに地上の臍があるかを問う」，「私は君に種馬の精子を問う」，「私はことばの最上の天穹を問う」] と。E′「ここにある祭場（*védi-*）が大地の外れ（上）の端である」，[「ここにある祭式が地上の臍である」，「ここにある *sóma-* が種馬の精子である」，「ここにいる祭官（*brahmáṇ-*）がことばの最上の天穹である」] と答える。

4. B–B′ にあたる Vājasaneyi-Saṁhitā XXIII 47f.[10]に注目する：

4.1. a	*kíṁ svit sū́ryasamaṃ jyótiḥ*	何がいったい太陽に等しい輝きか。
b	*kíṁ samudrásamaṁ sáraḥ/*	何が海に等しい池か。
c	*kíṁ svit pṛthivyái*[11] *várṣīyaḥ*	何が大地よりかさ高いか。[12]
d	*kásya mā́trā ná vidyate//47*	分量の見出されない（際限のない）のは何か。
4.2. a	*bráhma sū́ryasamaṃ jyótir*	br° が（cf. 3.B′）太陽に等しい輝きである。
b	*dyáuḥ samudrásamaṁ sáraḥ/*	天が海に等しい池である。
c	*índraḥ pṛthivyái várṣīyān*	Indra が大地よりかさ高い。
d	*gós tú mā́trā ná vidyate //48*	他方，牛の分量は見出されない。

5. Saṃyutta-Nikāya I p. 6: I (Sagāthavagga), 1 (Devatāsaṃyutta), 2 (Nandanavagga), 3に，この brahmodya の内容に類似した一対の詩がある：

ekam antaṃ ṭhitā kho sā devatā Bhagavanto santike imaṃ gātham abhāsi.（片隅に立って，かの神格が世尊の側で次の偈を述べたのだ：）

5.1. a	*natthi puttasamaṃ pemaṃ*	「息子［へのそれ］に等しい愛情はない。

b	*natthi gosamitaṃ dhanaṃ*	牛と等量の財はない。
c	*natthi sur^i^yasamā ābhā*	太陽に等しい輝きはない。
d	*samuddaparamā sarā ti.*	池たちは海を最上とする」と。　（世尊：）
5.2.a	*natthi attasamaṃ pemaṃ*	「自己自身［へのそれ］に等しい愛情はない。
b	*natthi dhaññasamaṃ dhanaṃ*	穀物に等しい財はない。
c	*natthi paññāsamā ābhā*	知恵に等しい輝きはない。
d	*vuṭṭhi ve paramā sarā ti.*	降雨が最上の池たちなのだ（→注17）」。

6.　*pemam* (*premáṇ-*)「いとしさ，愛情」を主題として，a で息子への愛と自己自身への愛とを対比させている。以下3行が Veda の問答に関連する。仏典では格言調の断定になっている。[13] 4.1.a「何がいったい太陽に等しい輝きか」は5.1.c「太陽に等しい輝きはない」へ置き換えられ，4.1.b「何が海に等しい池か」は5.1.d「池たちは海を最上とする」に対応する。4.1.d「分量の見出されないのは何か」は，答4.2.d「牛の分量は見出されない」と合わせて5.1.b「牛と等量の財はない」とされている。このことからも逆に，4.1./2.d によって計り知れない（価値または量の）財産が意図されていたことが裏付けられる。5.2.d「降雨は最上の池たちである（→注17）」は4.2.b の答「天が海に等しい池である」(雨に関するVeda 期の「科学」を背景とした問答[14]) と連関している。[15]

用語の上からは *mā*「計る」の VAdj. *mita-* による珍しい語形 *-sa-mita-*「同じく計られた，同一の量の」(5.1.b) が注目される。*-sama-* (4.1./2.a；5.1.c；4.1./2.b；5.1.a) と *mắtrā-* (4.1./2.d) とを圧縮した技巧的な用語法の印象を与える。[16] 5.1.d *samuddaparamā sarā*「池たちは海を最上とする」という Bahu-vrīhi も素直な表現とは言い難い。[17] *-sama-* の繰り返しの他‘5.2. 行頭の *natthi* : *vuṭṭhi*, b *dhañña-* : c *paññā-*、各行末の °*maṃ*, °*naṃ*, °*ā*, °*ā* に技巧が見られる。

これらの諸点を考え合わせると，SN の格言は Veda の brahmodya に典拠のある問答を下敷きにしていると推定される。[18]

7.　5.の主題は a の最もいとしいのは息子か自分自身かという対比であり，4.にはない。長男（子孫）の存在によって死後（の世界）の存続が確保されるとする伝統的立場と，輪廻（と解放）の根本に自己自身（*ātmán-*）を見る新しい哲学的立場[19]との対立が反映されていると見るべきである。このような世界観の対立は古Up.において既に問題となっていた。Yājñavalkya は言う：

「まさしくこのことを学んで知っていた往古の婆羅門たちは［自分の］子孫を欲しがらな

かったものなのだ。『子孫によって何をしようというのか。われわれにはこの ātman がこの *loká*- ([存続する] 世界) としてあるというのに』(と考えて)」[20]。

Śunaḥśepa の物語にも，これが当時思想界の一争点であったことを窺わせる Nārada 仙の偈がある (AitBr Ⅶ 13,6f. ～ ŚāṅkhŚrSū XV 17)：

「父祖たちは，息子によって順次分厚い闇を越えて行った。[息子は] 自分自身として自分自身から生まれたのだから。[息子は] 渡し越える s° の船である。垢が一体何になる。毛皮が何に。そして髭が何になる。苦行が何に。息子を，brahmaṇ たちよ，望め。それが議論を越えた *loka*- ([存続する] 世界) なのだ」。[21]

brahmāṇaḥ「学者たちよ」という呼びかけと，*avadāvada*-「議論のやりとりの無い (を越えた)」[22] という表現の背景には，守旧派の Ṛṣi に対立する，上記の Yājñavalkya (既に出家 *pra-vraj* に言及) のような台頭する新しい思想家たちの姿が推定される。

広い意味での新旧の世界観の対比は他の行にも見られる。b は牛を価値の中心に置く社会 (5. 1. b, cf. 4. 2. d) から農耕中心 (5. 2. b) への変化を映し，古き「天」(4. 2. b) に代わって直接言及される「降雨」(5. 2. d) も耕作の基礎として理解されよう。Veda の問答では「太陽に等しい光輝」(4. 1./2. a) は当然主題の *bráhmaṇ*- であるが，SN では *paññā*- (*prajñā*-) に置き換えられている (5. 2. c)。これも広い意味では，太陽と火の崇拝を中心儀礼にもつ宗教とその世界理解から，個人の認識構造の解明を中心とした哲学の深化の中に位置づけられよう。

8.　4. に直接先行する VājSaṁh XXIII 45f. (3. A-A′，これには黒 YV にも Parall. あり) は，殆どそのまま MBhār の Yakṣa と Yudhiṣṭhira の問答中に見出される (Ⅲ 297, 46f.)。[23] 他方，MBhār ib. 36f. は，これまた SN I p. 42：I 1,8,4 に平行句があり，[24] 仏教の価値観を対置する一句が更に付加されている。Buddha も学匠の一人として，当時の有力な学者・学派を凌いで成功を収めた訳であるが，彼と弟子たちの営為の過程にもことばによる決闘，謎掛け問答があったであろう。この種の文学の果たした役割を精密に検討することは仏典の成立・発展を考える上でも重要である。[25] また，仏典に収録された題材の背景には婆羅門達の蓄えてきた素材もあった筈である。それらのたとえ遠い反映でも見出されないか，Jaina 文献をも含めて更に広い視野から洗い直して行く必要がある。

---

1)　Franke Kl.Schr. 344-399, Rau Fs.Nobel 159-175；更に Lüders Phil.Ind. 80ff., 1ff., 47ff., Kl.Schr. 36ff.；Veda と仏教につき Windisch Māra 194f. をも参照。

2)　Pauly-Wissowa, Realencycl. 2. R. Ⅲ A2 (1929) s.v. Sphinx, 1716ff. (Lesky).

に広範な文献列挙がある。歌合戦（cf. SN I p. 222-224）にも似た背景が想定される。山本幸司『ことばの文化史［中世 2]』（網野他編 1989）33-118参照。

3) 定動詞は白 YV にのみ：*úpa-valhāmasi* VājSaṁh（～ŚrSū.: 3. D下線部）；*úpa-valhante, upa-válheta* ŚatapBr, 詳しくは GOTŌ I.Präsensklasse 293f.。更に Abs. *pravalhya* AitBr; VAdj. *pra-valhita-* GopBr, Yāska; Nom. *upa-valhá-* ŚatapBr, *-pravalha-* RV 所属の ŚrSū.（～SV の ŚrSū.: °*barha-*）; *pravalhikā-* AitBr～GopBr, KauṣBr, ŚāṅkhŚrSū, VaitSū, Br̥hDev。文学用語でもある *prahelikā-*「謎々」（Kl.）は *pravalhikā-* からは導き得ない（AiG 別見解）。*helā-*「軽率，ふざけ」，*helaya-*$^{ti/te}$「からかう，あざける」（＜ *heḍáya-*「怒らせる」）に依る置換形であろう。

4) GOTŌ 294[695a]。ギリシャ語 *elephaíromai*（三例のみ）はこの語源解釈（＜ **u̯elh$_1$b^h-r̥-i̯e-*）により「謎によって相手を混乱させる，欺く」と理解される。Hēsiodos の Thēbai を巡る神話群（Oidipūs など）の関連部分（神統記 330）で，Sphinx（Phix）と父母の同じ Nemea のライオンがこれによって人々を支配したと言われるのは示唆的。Mykhēnai 文書以来見られる固有名詞は，戦さや紛争の際に相手に謎掛けをする，知的な戦士のいたことを推定させる。相手を「罵倒する」職業名由来（HOFFMANN bei MAYRHOFER s.v.）の ai. ap. *kúru-*（「クル族」，「キュロス」）参照。

5) STERNBACH, Indian Riddles, 1975（以下の謎々の［従って5. は除く］箇所も個々には紹介されている）；上村勝彦『世界なぞなぞ大事典』（柴田他編1984）p. 1090-1097, 長柄行光『フィロゾフィア』72（1984）126-106参照。

6) 既存の答を知っていることではなく，整合性のある答の案出が求められたらしいことは RV IV 58,3 の謎に対して複数の解釈が記録・提案されていることからも推測される：KāṭhSaṃk 25f.（＝CALAND Versl. 1920 485f.）～GopBr I 2,16 ～ Yāska XIII 7（祭式学的解釈）；Śabara ad I 2,46（別の祭式学的解釈）；Kumārila Tantravārttika ad loc.（太陽［の運行］による祭式学的解釈）；Patañjali I p. 3,15ff.（文法学的解釈）；Kutūhalavr̥tti ad I 2,43, Jayanta Nyāyamañjarī（未見）；更に Uvaṭa, Mahīdhara ad VājSaṁh XVII 91, Sāyaṇa, GELDNER ad RV, KRICK 182[460] 参照。

7) *brahmódya-*（＜ *bráhmaṇ-*＋*údya-*）「*bráhmaṇ-* を議論すること」（Br.＋）:: *brahmavādín-*「*br*° を議論する者」（YS 散文＋）＝ *brahma-cárya-*「*br*° に携わること」（AV＋）:: *brahma-cārín-*「*br*° に携わる者」（RV^1, AV＋）。brahmodya については WITZEL StII 13/14（1987）363-415（Br., Up., 仏典の「頭が［7つに］弾け飛ぶ」［*vi-pat, phal* など］についても），RUBEN ZDMG（1929）83 247f., RENOU JAs 1949 7-46, BODEWITZ IIJ 16（1974）86ff. 参照。

8) 両 Jātaka については LÜDERS Phil.Ind. 346-361 参照。

9) ĀśvŚrSū X 9,2（～ ŚāṅkhŚrSū XVI 4,7-XVI 6, cf. ŚatapBrXIII 5,2,12ff., KātyŚrSū XX 7,10f.; DrāhyŚrSū XXVII 3,1ff., LāṭyŚrSū IX 10,8ff.）。当該 mantra を一連に挙げるのは VājSaṁh と上掲箇所のみ：A-A′＝VājSaṁh XXIII 45f.; B-B′～47f.; C-C′＝49f.; D-D′＝51f.; E-E′＝61f.＝RV I 164,34f.。RV 所収の E-E′ を同派所属の ŚrSū. は第1 Pāda だけで示すが（Āśv. は E と E′ の，Śāṅkh. は E の），それ以外は全て sakalapāṭha である。E′ は謎を集めた "brahmodyāni" 全52詩節中唯一の答であり，当該場面での使用を予定して収録されたと推定される。

10) ～ ĀśvŚrSū ib., ŚāṅkhŚrSū XVI 5, 1f., cf. ŚatapBr XIII 5, 2, 13。

11) *pṛthivyái* は Veda 散文 (所謂 Brāhmaṇa) に特有な Gen./Abl. としての -*(y)ai* (cf. WITZEL Dial.d.l.litt.I.-A. [Ed. CAILLAT 1989] 132-139) であるが, この mantra には Brahmavādin 達の語法 (の影響) が見られると考えるべきであろう; cf. *pṛthivyā́ḥ* 3. E。

12) 両 ŚrSū. は答 (*Indraḥ*) を先取りして *kaḥ, varṣīyān* と男性形。

13) BÖHTLINGK, Indische Sprüche² 2 (1872) Nr. 3670-3690 には *nāsti* で始まる金言が並ぶが, その中にも SN の余韻を止めるものがある: 3676 (Vṛddha-Cāṇakya から) *nāsti meghasamaṃ toyaṃ, nāsti cātmasamaṃ balam/ nāsti cakṣuḥsamaṃ tejo, nāsti dhānyasamaṃ priyam//*「雨雲に匹敵する水は無い。そして自己に匹敵する力(軍勢?)は無い。視線に匹敵する威光は無い。穀物に匹敵する好ましいものは無い」。

14) Cf. KLAUS, Die ai. Kosmologie (1986) 98f.

15) 「彼 (Puruṣa) は地をあらゆる場所で覆い, 十指分はみ出して立っていた」(RV X 90, 1) を想起させる「Indra が大地よりかさ高い」(4. 2. c) は 5. には出ない。*várṣīyāṃs-*「よりかさ高い」は既に古語であったろう; 古典期には *varṣá-*「雨, 年」から再解釈して「より年を経た」という意味で用いられる (cf. MAYRHOFER s.v.)。

16) この意味の *-samita-* は MBhār I 56, 15, Suśruta VI (Uttaratantra) 17, 84 にあるが, ともに Śloka 奇数行の6-8音節にあたり, *sáṃ-mita-*「等量・数・質…の」(Veda 以来普通) の韻律上の代用かと思われる。Pāli では他に見出せなかった。

17) 5. 1. d では *sarā* は *sara-*「池・湖」(m. n. < ai. *sáras-* n.) の Pl. と考えられる, cf. GEIGER SN ad loc.。5. 2. d *paramā sarā* はこれを受けて分けたものか。別の語 *sarā-* = ai. *sarā́-*「川」により「降雨が最高の川である」とも考えられる。

18) Veda の問答が諺として流布し, 間接的に仏典に入った可能性はある。祭式用問答が始めから既成の金言を下敷にした形式的応答であった可能性も否定はできない。

19) SN I p. 75: I 3, 1, 8 (Mallikā); 更に I p. 210, 12ff.: I 10, 7, 3 参照。

20) *etád dha sma vái tát pū́rve brāhmaṇā́ḥ/ anūcānā́ vidvā́ṃsaḥ prajā́ṃ ná kāmayante. kíṃ prajáyā kariṣyāmo yéṣāṃ no 'yám ātmā̀yáṃ loká íti* (BṛhĀrUp-M IV 4, 26 = ŚatapBr XIV 7, 2, 26 ～ BṛhĀrUp-Kāṇva IV 4, 22)。

21) *śaśvat putreṇa pitaro, 'ₐtyāyan bahulaṃ tamaḥ/ ātmā hi jajña ātmanaḥ, ⁺sairāvaty atitāriṇī// kiṃ nu malaṃ kim ājinaṃ, kim u śmaśrūṇi kiṃ tapaḥ/ putram brahmāṇa icchadhvaṃ, sa vai loko 'vadāvadaḥ//* (*sa irāvaty* を AitBr VII 21, 10 *sairāvatī- nau-* により訂正)。

22) 'ohne Reden-mit-Reden', Typ HOFFMANN Aufs. I 118f. (mit Lit.)。

23) WINTERNITZ Gesch.d.ind.Litt. I (1906) 296¹, HORSCH Gāthā (1966) 250⁵。

24) R.O. FRANKE Kl.Schr. 353, cf. HORSCH 251⁵。

25) Cf. Sn I 4 (Kasi-Bhāradvāja), I 10 (Āḷavaka), II 5 (Sūciloma), V (Pārāyana); Khuddakapāṭha V (Kumārapañha); DN 34 (Dasuttarasutta); Mahāummagga-Jātaka (546)。SN I (Sagātha) には謎掛け問答形式が多くみられる。その他 STERNBACH (注5) に詳しい。注2をも参照。

〈キーワード〉 謎掛け問答, Veda と仏教, brahmodya, Vājasaneyi-Saṁhitā, Saṃyutta-Nikāya。

(大阪大学助教授, Dr.phil.)